IS〈インフィニット・ストラトス〉Shine of Blindness

死食経典義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉Ｓｈｉｎｅ　ｏｆ　Ｂｌｉｎｄｎｅｓｓ

【Ｎコード】
Ｎ９０３１Ｕ

【作者名】
死食経典義

【あらすじ】
何をとち狂ったか、新しく連載を開始しちゃいました！！
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉の２次創作！
盲目の少年が主人公！さぁ、どんな物語になるのやら・・・！

第一話　新学期　男子　２名（前書き）

不定期連載になる可能性が大だけど！
それでも良かったら読んでくださし

第一話　新学期　男子　2名

・・・・・・・・・『ＩＳ』・・・・・・・・・正式名称インフィニット・ストラトス。宇宙空間での活動を想定され開発されたマルチフォームスーツである。しかし、今では宇宙空間での使用ではなく飛行可能のパワードスーツとして軍事転用され各国の主戦力として観られている

このインフィニット・ストラトス、使用すれば最強ともいえるものでありながら１つの欠点があった。『ＩＳは男性には使えない。起動できるのは女性だけ。』というものである

このことから、社会にも大きな影響が起こり、自然と『女尊男卑』という女性優先の社会ができあがってしまった。仕方のないことだもし、男と女が分かれ戦争が起こったら、ＩＳを使えない男側は１日も持たずに全滅してしまうのが目に見えている。

現在の社会で男で優先されるとすれば、モデルやホスト等の顔が良く女に気に入られるか、ＩＳ関係の仕事で貢献するかのどちらか位である。

そして、この物語はそんなＩＳとは全くの無縁だった少年と、知らぬうちにＩＳと関わっていた少年、この２人の少年の物語である

・・・・・・・これは・・・・・・・・・・・・・・・想像以上に・・・きつい・・・・・・・・・

クラスの中に男子は俺ともう1人だけ。残りは全員女子という状況・・・・・・

とある理由で奇異の視線を向けられることにはなれていたつもりだったけが・・・・・・それとは次元が違いすぎる・・・・・・・・・・

右隣の席にいるもう1人の男、『いっちー』こと織斑一夏に視線を送ると、俺と同じでクラス中からの視線にまいっているようだ

「・・・いっちー、きついな・・・」

「・・・・・・ああ。始、お互いにがんばろう・・・」

・・・・・・ああ、自己紹介が遅れた

俺の名前は、終　始。

言っておくが・・・終始(しゅうし)じゃないぞ。終(おわり)　始(はじめ)だ

隣のいっちーこと織斑一夏とは幼少の頃からの数少ない男の幼馴染兼親友だ

外見は・・・・・・某裁判ゲームのコーヒー検事にそっくりと言えば判りやすいな。髪も白いし、アレと同じゴーグルもつけてるし

先に言っておくが、ゴーグルを付けているのはファッションとか、コーヒー検事を信仰しているからじゃないぞ。ちゃんとした理由があって着けてるんだ

しかも、このゴーグル。ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉に使われているハイパーセンサー搭載なのだ

ハイパーセンサーはＩＳに搭載されている高性能センサーで、操縦者の知覚を補佐する役目を行っている。普通は目視できない遠距離や視覚野の外（後方）をも知覚できるようになるっていう優れものなのだが・・・・・・・・今この状況だと、後ろの女子の視線も知覚してしまっている

はっきり言おう・・・・・・苦行だ

『なら外せばいい話だろう』

『・・・クラスメイトの顔を覚えなきゃならんから、外そうにも外せん・・・』

『ならば、乗り切ることだ。主よ』

今俺に話しかけてきたのは、俺が今付けているゴーグルだ

誰だ！精神病んでるとか思った奴は！！俺は精神病なぞ持っちゃいないぞ！

俺のゴーグルは俺の眼であり、俺の相棒でもあるＩＳなんだ！決して精神病とかじゃないからな！！

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲ（ショートホームルーム）をはじめますよー」

そんな声が聞こえ、声のした方向を見ると・・・って、ハイパーセンサーがあるから見る必要もないんだが、礼儀として相手の方は見

ないとな

「みなさん、入学おめでとー。私は副担任の山田真耶です」

そう言って黒板の前でにっこりと微笑んだ山田先生

身長は低めで他の女子生徒と殆ど変わらず、しかも少しだぼっとした服を着ているのもあって、教師というよりも学生に見えなくもない。またかけている眼鏡も大きめなのか、若干ずれている

ぶっちゃけ、『子供が無理して大人の服を着て、私も大人です』と背伸びをしている感じだ

「あ・・・え、え～と・・・・・・それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

先生が自己紹介をしているが、クラスは無反応。その理由は無論俺といっちーの存在のせいだろう

ＩＳ。正式名称〈インフィニット・ストラトス〉。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ

でも、製作者の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、スペックの高さから兵器、そして各国の思惑からスポーツにと落ち着いた・・・・・・所謂、飛行パワードスーツだ

だが、このＩＳには致命的な欠陥が、女性にしか使えないという欠陥があった

そのお陰で、女性はかなり優遇・・・もとい女＝偉い、女尊男卑の

構図になっている。男は奴隷や労働力としかみない女さえいるのが今の世界だ

「じゃ、じゃあ、自己紹介をお願いします。えっと・・・出席番号順で」

って、ＩＳのことを説明していたらいつの間にか自己紹介タイムか

女子生徒の自己紹介を聞きながら、自分の自己紹介をどうするかを考えていた

「・・・・・・くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ！？」

・・・ん？ああ、もういっちーの順番だったのか

てか、いっちー。考え事でもしてたんかね？声は裏返ってるし、でかいし。後ろの女子がくすくす笑ってるじゃないか

どんなときでもクールに、冷静に

「あ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、駄目かな？」

・・・・・・いや、センセ？教師なんだからそんなペコペコ頭下げるもんじゃないですよ？

「いや、あの、そんなに謝らなくても・・・・・・っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

・・・・・・・・・いや、本当にこの人先生なのか？俺たちと同じ生徒が教師役をやってるとかじゃないのか・・・？

「えー・・・・・・えっと・・・織斑一夏です。よろしくお願いします」

いっちーは立ち上がって後ろを向いた

そうなれば勿論、クラス中の女子の視線は一夏に向く

俺に向いていた視線も・・・一時的ではあるが・・・いっちーに向けられ、俺は暫しの休息を得ることが出来た

「・・・・・・・・・」

「「「「「「・・・・・・・・」」」」」」

・・・・・・おい、いっちー。どうした。もっと喋れ。そして俺の順番が来たときに俺が楽に出来るような自己紹介をしろ

◇

織斑一夏　ＳＩＤＥ

ま、まずい、どうすればっ！

俺は、何をしゃべればいいか分からなかった。頼みの綱のファースト幼馴染こと篠ノ之箒も助けてくれない。親友の始も、前を向いたまま

いかん、マズイ。このまま黙ったままだと『暗い奴』のレッテルを貼られてしまう！

俺は一度呼吸を止め、再度息を吸い、切り札を口にした

「以上です！」

がたたっ！と、ずっこける女子が数名。どんだけ期待してんだよ。無茶いうな

◇

「以上です！」

いっちーのその発言に、俺は思わず頭を抱えてしまった

こ・・・この鈍感馬鹿いっちぃぃぃぃぃぃ！！

これで俺の自己紹介のハードルが上がったじゃねーか！

くっ・・・どうする・・・・・・どうする！

いっちーの情けない挨拶のせいで上がった（と思われる）自己紹介のハードルをどうクリアするか、頭を悩ませていると・・・・・・いっちーの後ろに良く知る人物が立っていた

黒のスーツにタイトスカート。すらりとした長身。よく鍛えられているが決して過肉厚ではないボディライン。組んだ腕に狼を思わせる鋭い釣り目

彼女はちぃ姉、じゃない織斑千冬。我が親友、織斑一夏の実姉にして、ＩＳ同士での戦闘の世界大会、第一回モンド・グロッソの総合優勝者のブリュンヒルデ。そしてちぃ姉は俺の未来のお嫁さん

誰だ！『妄想おつｗ』とか、『何言ってんだお前、ワロスｗ』とか思った奴！

未だに嫁に来てというとアイアンクローを喰らっているが、コレは決定事項だ！異議は却下だ！

・・・って、話しがずれたな

ちぃ姉は無言で手に持っていた出席簿を振り上げ、いっちーの頭目掛けて勢いよく振り下ろした

パ、パアンッ！パン！

俺はちぃ姉が振り下ろす瞬間に合わせて、隠し持っていたハリセンを神速抜刀をして一夏の頭を叩いた。が、ちぃ姉はそれをしっかり見ていたため、俺の頭にも軽めの出席簿アタックが飛んできた

「げえっ！？関羽！？」

パアンッ！！と2度目の良い音が響いた。くっ・・・いっちー！その愛情を貰える立ち位置を俺と代われ！

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

いっちーはかなり良い場所に貰ったのか、頭を抱えて「おおおぉぉぉ・・・」と唸っている、ざまぁ

「あ、織斑先生。会議はもう終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと・・・」

これくらいはって・・・・・・いっちー相手にペコペコ頭下げて、涙目になるのが副担任なのか・・・？

・・・・・・・・・・・・って、山田先生、いや、やまちゃんが副担任って事は・・・・・・もしかしてもしかすると！！

その疑問に答えるように、ちぃ姉は教壇に立った・・・・・・めちゃくちゃ様になってる

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物にするのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。逆らってもいいが。私の言うことは聞け。いいな」

おおぅ！女王様発言！うんうん、ちぃ姉はこうでないとね！

ちぃ姉の女王様発言に、クラスの女子はひくことなく・・・

「キャーーーーー！千冬様、本物の千冬様よーー！」

「ずっーーーとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

「お嫁に来てください！」

と、黄色い声援が響いた。因みに最後のは俺が言ったのだったりする

そんなクラスの様子にちぃ姉はうっとうしそうな顔をしてた

「最後のは無視するとして・・・毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ・・・私のクラスにだけ集中させてるのか？」

ポーズじゃなく本当にうっとうしがっているちぃ姉。てゆうか、最後のは無視って・・・・・まあ、いつもそうなんだけどさ・・・・・

「きゃあああああ！！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも、ときには優しくして！」

「そして、つけあがらないように躾をして～！」

「躾のときはボンテー、じゅっ！？」

ちぃ姉の出席簿アタックが炸裂し、今回は最後まで言うことが出来なかった、残念

そーいや、頭抱えてたいっちーはどうなって・・・・・ん～あの顔は、自分の姉が担任だったことに驚いて動揺して混乱してる顔だな。全く持ってわかりやすい。流石はいっちー

「で？挨拶も満足にできんのか、おまえは」

「そうだぞ、いっちー。これでお前は『暗い奴』のレッテル決定だな、ワロス」

パシン！

ちぃ姉に続いていっちーに一言言ったら出席簿（あいのむち）を頂きました。ひゃっほーい

「いや、千冬姉、俺は――」

パアンッ！と3度目、俺のハリセンも入れると4度目、の快音が響いた

「織斑先生と呼べ」

「・・・はい、織斑先生」

とまぁ、こんなやり取りをしていたら

「え・・・・・・？織斑君って、あの千冬様の弟・・・・・・？」

「それじゃあ、ＩＳを使える男っていうのも、それが関係して・・・・・・」

「ああっ、いいなぁっ、代わってほしいなぁっ」

いや、待て。代わってほしいって・・・・・・ちぃ姉は家事全然駄目なんだぞ。意外とずぼらなんだぞ。家事万能じゃないと嫁に貰えな、パシン！あ痛

「なにやら、不穏な空気を感じたのでな」

「いや、事実でしょ。ちぃ姉」

「もう1発欲しいよう「是非！」・・・・・・あー、んん。終、自己紹介をしろ」

俺の間髪入れない返事に、ちぃ姉は咳払いをして場の修正を始めた

ちぃ姉の愛の鞭なら、俺は何時でもウエルカムなのに・・・

いつまでも座っていても仕方ないので、一夏と同じく後ろを向いて自己紹介をするか

「終始だ。隣の織斑一夏・・・もとい、いっちーとは幼少の頃からの馴染だ。趣味はいっちー弄り。得意なこともいっちー弄り「いや、俺いじりって趣味にならんだろ！」うっさい、俺の自己紹介中だ！んん、ＩＳの操縦は素人だ」

あえて、操縦の部分だけを強調して言っておいた。気が付いたのは

いないだろーな

「終。ゴーグルを取ってやらんか」

「えー・・・取ったらクラス中、静まりかえっちゃうよ？」

「いいから、とれ」

「あいさー」

ちぃ姉に言われ、ゴーグルに手をかける。クラスの女子はゴーグルの下の素顔が気になってるのか、俺を凝視している

「ほいっと」

「「「「「「・・・・・・・え？」」」」」」

ほら、クラス中が静まり返った

その理由は俺の顔を見たから。正確には俺の両目を潰すように走っている傷跡を見たからだ

第一話　新学期　男子　２名（後書き）

死「作者だよーん」

始「始だ」

死「なんやかんやで始めちゃったＩＳの２次小説でござる！」

始「なんやかんやついでにちぃ姉を俺の嫁に！」

死「そんなことよりも、感想待ってまーす」

始「そんなこと・・・じゃ、ねえええええええええええええええ！！！」

始　の　始まり（前書き）

前回のＮＧシーン

ちぃ姉は無言で手に持っていた出席簿を振り上げ、いっちーの頭目掛けて勢いよく振り下ろした

パアンッ！バシャッ！

俺はちぃ姉が振り下ろす瞬間に合わせて、手元にあったコーヒーをいっちーに放り投げた

一夏「ど熱っちゃあああああーーーー！！！」

始「クッ・・・無様な自己紹介しか出来なかったいっちーには、頭がすっきりするさわやかな始ブレンドコーヒー５６号を奢っちゃうぜ！」

千冬「では、私も１杯貰おうか」

一夏「ちょっとはこっちの心配をしてよ、千冬姉！てか始！どっからコーヒー出したんだよ！！」

始の始まり

自己紹介をしてると、ちぃ姉からゴーグルを取るように言われて、取ったら―――クラス中が静まり返りましたとさ

てか、俺はなんで語り調になってんだ？

つか、そもそも何でＩＳ学園に行かなくちゃ行けなくなったっけか・・・・・・

◇

「ふふふ～ん♪ふふ～ん♪いや～流石は天才束ちゃんだね！もうメンテナンスは完了だよー」

「・・・・・・いや、たば姉。メンテしてくれるのはいいんだけど、拉致同然に連れてくるのはどーかと思うんだけど？」

まぁ、俺のつけてるゴーグルはたば姉特製のハイパーセンサー搭載型で俺も特殊な方法でハイパーセンサーを使ってるから、たば姉がメンテしてくれた方がいいのはわかる

でもさ、メンテすんなら入試前にしてくれた方が良かったんだけどなー。なんで入試の翌日にメンテ、しかも拉致同然に連れてこられるのも・・・・・・・・・・・・コレで何度目だ？

・・・もう毎度のことだからいても無駄なのはわかってるんだけどさぁ

いいや・・・テレビでもつけるか。ゴーグルがメンテ中だから、音だけしか聞けないけどさぁ

えーと・・・確かこの辺りに・・・・・・・・・・・・・・・お、あったあった。それ、ポチッとな

ヴゥンという音の後にテレビから音声が聞こえてきた

――さて、それでは話題の織斑一夏くんについてです

・・・・・織斑一夏？もしかして、俺の知ってる織斑一夏こといっちーなわけないよな

――えっと、彼はＩＳを動かしたんだっけ？それ本当なの？

――ええ。その場を目撃した人もいます

――そうなると世界で始めてＩＳを動かした男性になるね

「すごいよねーいっくん。ＩＳを動かしちゃうなんて、束さんもびっくり仰天玉手箱だよ」

・・・・・・・・・・・・・・・いっくん？

「いっくんって、いっちーのこと？」

「いっくんはいっくんしかいないよ？」

・・・・・・・・・・・・・・・いっちー、お前は一体何をやらかしてるんだ

テレビでは評論家や番組司会者が何やら言っているが、唖然としている俺の耳には入ってきていない

「・・・・・・は・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・・・・・・・はーくん！！」

「うお！？」

たば姉の大声で俺は何とか現実世界に戻ってこれたようだ

「んもー。さっきから読んでるのに無視するなんて極悪だよ！いくら束さんもぷんすか鶏冠（とさか）にきちゃうよ！！」

「あー・・・ごめん。いっちーの所業に現実逃避してた」

「ふーん・・・・・・まあ、いいや。はい、メンテナンス完了だよ」

「ん、ありがと。たば姉」

たば姉は「落しちゃ駄目だよ」と言って俺の手にゴーグルを乗せた

渡されたゴーグルの向きを確認し、いつものように装着。そうしたら、いつものように３６０度の風景が見える――――――――――――のと、何故かウインドウが表示された

――使用者登録と再起動が完了。確認ボタンを押してください

「――――は？」

「ほへ？」

俺とたば姉の口から、音は違うけど「なにこれ？」って意味の言葉が漏れた

・・・・・・・・使用者登録と再起動って・・・・・・・・・・・・・・・・確か、ＩＳの専用機登録の時にするやつだっけか？何でこのウインドウが出てきたんだ？？

「たば姉？なんか変なプログラムでもいれた？」

「いやいや、束さんはなんにもいじってないよ？いつも通りにメンテナンスをしただけだよ？」

「・・・どーしましょ？」

「う～ん・・・ぽちっとな」

どうしたものか聞いたら、たば姉は、これが返事だ！と言わんばかりにウインドウの確認ボタンを押してしまった

「ちょっ！？なに勝手に――――っ！」

たば姉に文句を言おうとしたが、キィィィィィィィンと高い金属音が響いたことで、中断させられてしまった

そして、俺の体が光の粒子に包まれ――――――――すぐに光りが収まった

「一体全体、なんだった・・・・・・・・・・・・・・なんじゃあこり

ゃーーーーーー！！」

ゴーグルのハイパーセンサーを通じて、俺は今の俺の姿を見て、どこぞの刑事の如く叫んでしまった

背中に銃が2本、腰にも2本、腕と足にも装甲。型の横にはヨーヨーみたいな形の非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）。色合いはベージュをベースにところどころ赤や緑が入っていて、軍隊の兵士みたいなかんじを受けるつまるところ、俺もいっちーと同じく、ＩＳを起動させてしまっているということだ・・・・・・

「おおー！はーくんもＩＳを起動できちゃうなんて・・・・・・桃を真っ二つにしたのに中にいた桃太郎には傷一つついてなかったことくらいに驚きだよ」

「・・・・・・・・よくわからん表現だな」

そんな俺のツッコミを余所に、たば姉は俺が装着しているＩＳにコードやらなんやらを繋いで、う～んと唸りだした

うんうん唸ってないで、説明をお願いしたい・・・

「見たことの無いフラグメントマップを形成してる・・・・・・コア・ネットワークへの接続はできないように調整したはずなのに接続されてるし――う～ん・・・脳と直接接続（ダイレクトリンク）させたときはこんなのなかったんだけどな～？」

うむ・・・・・・意味がわからん・・・・・・

つーか、これどーやって脱げばいいんだ？

《なに、長い時間をかけて自己進化をしただけだ》

いきなり聞こえてきた声に、俺とたば姉は顔をあげた

「え？なにこの声？どっから？」

「――――うそ・・・ＩＳが喋ってる・・・・・・」

《何を驚いている。自己進化を組み込んだのは我等が創造主である貴女自信であろう。我は長い時間をかけ自らを改変しただけだ》

「確かにコア深層に独自意識いれたし、自己進化をするように作ったけど・・・・・・・・・まさか自分から話せるようになるとは思ってなかったよ」

《我自信は主の目となり、光をなる為に進化をしただけだ。主を共にあろうと改変を続けて行った結果が今の状態という訳だ》

――――――――――――え～っと

「つまり、どーゆうこと？」

《つまりは、我自信が主に合わせ進化し話が出来るようになったということだ》

「わかりやすくいうと、この子ははーくんの専用機になったってことだよ。ついでに言うと、今までＩＳの声を聞いたって人はいるけど、対話が出来る人っていないんだよ、凄いことなんだよ～！」

・・・・・・専用機？専用機ってあれですか？国家代表操縦者とか代表候補生や企業に所属する人に渡されるＩＳだよな・・・・・・

「ええっ！？専用機！？！？」

「反応が鈍いよ？」

いやいや！驚きが強いと反応は鈍くなるもんですよ！

「よーし。それじゃあ早速世界に向けてはーくんの事を発表しちゃおー！」

「え！？ちょ、たば姉待っ――――」

「やっぱり企業に所属ってことにしたほうがいいよね。その方が変なところから勧誘とかも少ないだろうし。企業は・・・私が新しく立ち上げてそこの所属にしちゃおう。うん、そうしよう。企業名はどーしよっか？分かりやすい『天才束株式会社』がいいかな？でも、それだとひねりがないもんねー。ここはもうちょっと一ひねり入れた方がいいかな？はーくんはどう思う？」

「・・・そーですねー」

俺の意見を綺麗さっぱり耳に入れてくれる様子のないたば姉に俺はお座なりな言葉で返した

たば姉はそっからまた、あーでもないこーでもないと言っている

《ふむ。我等が創造主はかなり変わった人のようだな》

「・・・もういっそ変態って言ってもいいレベルだと思うけどな」

《ふ、そうか》

ああ、そうだ。大切なことを忘れてた

「まだ現状の理解ができてないけど――――宜しくな・・・って、お前の名前ってなんなんだ？」

《・・・名前か・・・・・・我はコアナンバー０００、もしくは試作コアとしか呼ばれていなかったな。良ければ主がつけてくれ》

う～ん・・・・・・なら『あれ』が一番ぴったりか

「お前は目が見えなくなって、音や気配は感じられても光がなかった俺の新しい目になって、光り輝く世界を見せてくれた。だから、お前の名前は――――――「光輝（こうき）」だ」

《『光輝』か。良い名だ。これから宜しく頼むぞ、我が主始》

「こちらこそ宜しくな、光輝」

◇

――――――んで、その後にたば姉がマスコミやらなんやらに俺のことを発表して、気が付いたらＩＳ（ここ）学園に入れられてたんだよなぁ・・・

「・・・り・・・・・・お・・・・・・・・・・・・わり・・・・」

てか、たば姉が発表してなかったら、ここには入らなくてすんだんだよな？あの時、武力行使してでも止めるべきだったか？いや、でも止めてたら幼馴染のほーちゃんとも再会できなかったんだよなぁ・・・・・・良かったのか悪かったのか

「お！わ！！り！！！」

「ん？」

パシーーン！！

ぐうぉ・・・ちぃ姉に呼ばれたと思ったら、出席簿が飛んできましたよ

「全く、私の声を無視するなど１００年早い。さっさと自己紹介の続きをしろ」

「はーい、ちぃ姉」

パァン！

「返事は、はい。それと織斑先生と呼べ」

だが、断る！――――――とは言わずに自己紹介の続きをするＫＹじゃない俺

「えーと、こんな目をしてますが、ゴーグルをつけてれば周囲は見えるようになってるんで気軽に話しかけて来ちゃって下さい――

――――――あと最後に1つ。ちぃ姉は俺の嫁」

ゴンッ！

嫁と言った瞬間にちぃ姉の拳骨が振ってきた

「痛いじゃないか、ちぃ姉！」

「貴様が馬鹿なことを言うからだ。それと、織斑先生と呼べ！」

「イヤだ！それに俺はちぃ姉が嫁になるまで、ちぃ姉は俺の嫁というのをやめない！」

「もっと叩かれたいようだな・・・！」

「是非お願いします！」

◇

一夏ＳＩＤＥ

「是非お願いします！」

・・・・・いやさ、始なら絶対に言うとは思ってたけどさ・・・・・・てか、是非お願いしますって・・・お前はＭか？Ｍなのか？

そんな始に千冬姉は、はぁーと溜息をついてる

始も千冬姉のことになったら頑として譲らないからな。ある意味尊敬できるよな

そんな2人を見ていると、千冬姉が始を座らせてから驚きの発言をした

「お前達に言っておく。終は専用機持ちだ」

その発言にクラス中が騒がしくなった

———男子で専用機持ち！？

———専用機！いいなー！

———私も専用機欲しい

———千冬様は私の嫁よ！

・・・・・・最後のは聞かなかったことにしよう。忘却しよう。デリートデリート

「先生。質問いいですか？」

そんな中、はい、とショートカットの女生徒が挙手した———名前は知らない

山田先生がどうぞと言うと、女生徒が質問しだした

「専用機って国か企業に属さないと与えられないはずでは？終君って、国の代表候補生じゃないですよね？まさか企業に属してるんですか？」

そうなのか？初めて知ったぞ

んで、この質問には千冬姉が答えた

「そうだ。終は企業に所属している」

「その企業ってどんな企業なんですか？」

俺もどんな企業なのかは気になるな。変な企業だったら色々とやばいだろうし。俺なんか生体調査をさせてくれとか言われたし

千冬姉はとても言いにくそうに口を開いた

「・・・・・・・・・・・・天上天下唯我独尊天下無敵至上最高天才束様株式会社だ」

長っ！？四字熟語を使いまくってるけど、一体何文字だよ！

――――――ガン！

何かがぶつかる音がしたから、そっちを見ると・・・・・・箒が机に突っ伏していた

「かなりふざけた潰したくなるような名前の企業だが、残念なことに日本は正式に承認している――――――ちっ」

・・・随分と毒を吐いてる上に、最後に舌打したよな、千冬姉？

それにしても・・・束さんの作った会社なら、生体調査とかはない・・・・・・ないと言い切れないのは何でだ？

始　の　始まり（後書き）

始「なんなんだ？前書きのあれ？」

死食「ん？ああ、あれね。何となくいままで作ったのと違う感じにしてみたくてやってみた。公開はするけど後悔はしてない」

始「いっちー並に寒いギャグだな」

一夏「それって、俺のも寒いって言ってるよな！？」

始・死食「気のせいだよー」

千冬「精進しろ。馬鹿者」

一夏「誰か俺に優しくしてくれえええええええええええ！！」

始「それでは、また次回」

千冬「感想は随時受け付けているからな」

再会　幼なじみ（前書き）

「えーと、こんな目をしてますが、ゴーグルをつけてれば周囲は見えるようになってるんで気軽に話しかけて来ちゃって下さい――――――――あと最後に１つ。ちぃ姉は俺の妻」

ゴンッ！

妻と言った瞬間にちぃ姉の拳骨が振ってきた

「痛いじゃないか、ちぃ姉！」

「貴様が馬鹿なことを言うからだ。それと、織斑先生と呼べ！」

「イヤだ！それにこの前婚姻届けをだしたから、ちゃんとした夫婦じゃないか！」

「もっと叩かれたいようだな・・・！」

「是非お願いします！出来れば鞭とろうそくもセットで！ハァハァ・・・」

今回はちょい短いです

再会　幼なじみ

一夏ＳＩＤＥ

「あー・・・・・・・」

参った・・・これはマズイ。ダメだ。ギブだ。・・・もうゴールしていいよな？

「いっちー、ネタは自重ー・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わって休み時間になったはいいが・・・・・教室内外の異様な雰囲気はいかんともしがたい

『世界でＩＳを使える２人の男』ということで、廊下には他のクラス、二、三年の先輩らが詰め掛けている

この珍獣を見に来た雰囲気に俺と始は大分参っている

というか、始はゴーグルを外して何も見えない状態になって机に伏せている。それでも、始の認識範囲内の雰囲気まではカットできないようで、たまに呻いてる

ちらっと隣の女子を見ると、それまで俺に向けていた視線を慌ててそらしたが、『話しかけて！』な雰囲気はそのまま・・・・・・

しかも、俺は元日本代表で全国の女子の憧れの織斑千冬の弟、始は

現総理大臣の終轟（おわりごう）の孫っていうプロフィールがあるからますます話がややっこしい

（誰かこの状況を助けてくれ・・・・・・）

そう考えていると

「・・・・・ちょっといいか。一夏、話がある」

「箒？」

六年ぶりに再会した幼なじみが、今、天使に見えるのは・・・・・・

間違いじゃないな

「始、おまえもだ」

「うぇ～い。ほーちゃん、お久し～」

「取り合えず・・・廊下でいいか？」

「俺の一存で却下。屋上に行こう。この視線の嵐から一時的にでもいいから抜け出したい・・・・・」

あー・・・・・確かに。廊下に出ても今とさしてかわらんな

「早くしろ」

「そうだぞ、いっちー。早くしろ」

「お、おう」

ついさっきまで机に伏せってた始が、箒の隣で踏ん反りかえってるのは何でだ？

◇

ほーちゃんが話があるとの事で、やって参りました屋上でござる

え？口調が変？さっきの雰囲気のせいだから気にしない方向で・・・

やってきたはいいが・・・・・・・・ほーちゃん、話があるって言ってたのに、話し始めないの？

「久しぶりだな、箒。六年ぶりだけど、すぐわかったぞ」

ほら、いっちーが先に口を開いちゃった

「え・・・・・・」

「ほら、髪型一緒だったしな」

いっちーのその言葉に照れたのか、ほーちゃんはポニーテールをいじりだした

「よ、よくも覚えているものだな」

「それは「いや、忘れないだろ、幼なじみのことくらい」・・・・・・人の台詞にかぶせてくるいっちーは、象に踏まれて死ぬといいよ」

「何でそんなこと言われなきゃならん！」

「自分の胸によーく聞いてみるといい」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

ほら、ほーちゃんの機嫌も右肩下がりになってるじゃないか！

コレだからいっちーは朴念仁なんだよ！頑張ってほーちゃんを応援していた俺の苦労を現金にして返して欲しいわ！

「そ、そういえば！」

話を変えてくるか・・・・・・また地雷踏むんだろうな

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「なっ、なんでそんなことをしってるんだ！？」

おー、顔赤くしちゃって。ほーちゃんはかーいいね～

「なんでって・・・新聞見たからな」

「なんで新聞なんか見ている！！」

「いや、俺だって新聞くらい読むぞ？」

だな。俺だって新聞は読んでいる。普通の新聞、経済新聞、スポーツ新聞、エトセエトセ・・・・・・

キーンコーンカーンコーン

ありゃ？時間切れ？もうあの教室（カオス）に戻らないと駄目なの・・・・・・・
はぁ・・・・・・・・・・

「俺達も戻ろうぜ」

「わ、わかっている！」

ほーちゃんは早足で屋上から出て行ってしまった

いっちーはほーちゃんが顔を赤くして怒鳴ってるみたいなふうに思ってるんだろーな

う～ん・・・・・・よし、いっちーは放っておいてほーちゃんを追いかけよう、そうしよう

俺はいっちーをおいてほーちゃんを追いかけた――――――思っていたよりも早足じゃなかったようですぐに追いついたけど

「ほーちゃんほーちゃん」

「む、始か。どうした」

「うん。さっき俺空気だったから、話しながら戻りたいなって思ってね」

さっきは空気を読んで2人の話を聞いてるだけだったからな

まぁ、殆ど話してたのはいっちーだったけど

「いいだろう。それで話とはなんだ」

「うん。完結に聞くけど、ほーちゃんは今でもいっちーにラブ？」

「？　ラブ・・・なっ、何を言うのだ、お前は！！そんなわけがあるまい！」

うんうん。判りやすいね、ほーちゃん

「顔を真っ赤にして言っても説得力ないよ、ほーちゃん」

「うぅ・・・・・・・」

さて・・・・・・ほーちゃんがいまだにいっちーラブを確認できたし、本題にはいろうかな

「んと、ほーちゃんが転向した後にいっちーは2人ほど落としてるから」

「なにっ！？そ、それは本当か！」

うん、本人は無自覚だけどねー。ホント、朴念仁はたちが悪い

「一応、ほーちゃんの写真を魅せたりして牽制はしておいてあるけど・・・・・・ほーちゃん、全力でいっちーを落しにいかないと駄目だからね」

「お、おとす・・・・・・というか、写真をはなんだ？」

「ああ、たば姉にゴーグル（こいつ）のメンテしてもらった時にほ

ーちゃんの写真を借りてたんだよ、うん。それにさ、さっきほーちゃんはいっちーの言葉に照れてたでしょ？そーゆーときに笑顔を見せるとか、ありがとうっていうとか」

「し、しかし・・・私はそういうのは苦手だ・・・」

「最終手段で昔よりもよく育った、その胸をアピールしていくとガフッ！」

「殴るぞ」

どっから出した・・・・・その竹刀・・・・・・・・・・

「殴ってから言ってるじゃん。てか、いっちーにも同じことする気じゃないよね？駄目だよ、そんなことしちゃったらイメージダウンで、いっちーに嫌われちゃうよ」

「なっ！？そ、それは困る・・・一体どうすればいいのだ・・・・・・」

相変わらずほーちゃんはこういった恋色沙汰の押しが弱いんだよなぁ・・・・・・よし！

「いっちーは朴念仁だから、ストレートに『好きだ。私と結婚を前提に付き合ってくれ』くらい言わないと駄目だろうね」

「・・・・・・すまん、私には無理だ」

「うん。ほーちゃんは意外と奥手だからね。だから、まずは自分のアピールから始めたらいいと思う。そーだね、最初は2人きりで話

したりしたらいいんじゃないかな。あ、その時はさり気なく隣に座るのもありだね。話すことは会えなかったときのことでも、ＩＳのことでも何でもいいから、２人きりで話す。いい？２人きりでだからね。ここ大事だから」

「う、うむ・・・」

ほーちゃんといっちーを２人きりにするための策はもう講じてあるから、後はほーちゃん次第。でも、このことは今は言わないでおく何故かって？そりゃー、ほーちゃんを驚かせるために決まってるじゃん

その後、他愛のない話をしながら俺とほーちゃんは教室に戻った

いっちーはちょっと遅れて、ちぃ姉の出席簿を頭に頂戴してた――

――――――もうちょっと学習しような、いっちー・・・・・・

再会　幼なじみ（後書き）

始「おい、前書きの俺、唯の変態じゃないか！」

死食「え？自分のこと自覚してなかったのか！？」

始「俺はちぃ姉が好きなだけのノーマルだ！！」

一夏「いや、叩かれてるのに是非お願いしますって言ってたら、十分変態だろ？」

始「黙れ、朴念仁。象に踏まれて死ね」

一夏「なんでそこまで言われなきゃいけないんだ！！」

始「それでは、また次回」

箒「感想を待っているぞ」

英国　の　代表候補生（前書き）

前回のＮＧシーン

「最終手段で昔よりもよく育った、その胸をアピールしていくとガフッ！」

「それにしても、大きくなったよね～。とくにおっぱイガッ！？」

「姉さん。いきなりわき出ないでで下さい。それと２人共、殴りますよ」

「殴ってからいった～。箒ちゃんひどーい」

「殴ってから言ってるじゃん。てか、いっちーにも同じことする気じゃないよね？駄目だよ、そんなことしちゃったらイメージダウンで、いっちーに嫌われちゃうよ」

「なっ！？そ、それは困る・・・一体どうすればいいのだ・・・・・・」

「もしそーなったら、押し倒しちゃえばい、アウッ！？」

「殴りましたよ」

「うう、箒ちゃんの愛が痛いよ～」

今回はちょっと個人解釈が入っていたりします

英国　の　代表候補生

「決闘ですわ！！」

《良かろう！四の五の言うより判りやすい》

――――――なんで、こうなった？

◇

ほーちゃんにアドバイスをした後の授業で、いっちーが授業に全くついて来れなかったり、必読のはずの参考書を揮い電話帳と間違えて捨てたのを自白してちぃ姉に鉄拳を貰ってたり

まぁ、いっちーに関すること以外は特に何もなかった

え？俺はどうだったかだって？ちゃんと参考書は暗記してあるし、光輝自身も講師として色々と教えてくれてるからなんら問題はないね。ていうかさ、ＩＳがＩＳのことを教えるってのもなんか不思議な感じだな

「うー、いたたた・・・・・・」

あ、やまちゃん先生がこけた

二時間目の休み時間、いっちーにＩＳのことを少しでも教えてくれと頼まれたので、ちぃ姉ばりの厳しさを持って教えている

「何故わからん、馬鹿者」

「いや、ＰＩＣとか、いきなり専門用語言われてもわからんぞ。出来れば漢字変換して「ちょっと、よろしくて？」・・・へ？」

ちょっとよろしくない――――というのは、何とか飲み込んで俺達に話しかけてきた人物に視線を向けた

青い瞳に鮮やかな金髪をロールさせてドリルにしている・・・外国出身らしい女生徒がいた

ドリルロールな髪は「わたくし、貴族ですのよ。おーほほほほほ」みたいなオーラをかもし出してて、彼女自身も『いかにも』現代の女子といった感じの雰囲気を出している

今はこういった女性は少なくはない。ＩＳの操縦は女性だけしか出来ないから女性はかなり優遇されている。なかには、いきすぎて女性＝偉いって思ってるド阿呆までいる。よく見かけるのが、ＩＳの

操縦が出来ないのにえばり腐っている女性。俺自身も一度そんな阿呆にパシらされかけたけど、たまたま近くに用事があったちぃ姉が相手を論破してくれた――――なんてこともあった

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ・・・」

「訊いてるけど、今はいっちーの勉強を見てるから忙しいんだけど」

地味にいっちーに基礎から教えていかなきゃいけないから、本当に大変なのだ

なので、大した用事じゃなければ昼休みか放課後あたりにしてもらいたい

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

えーっとさ。ぶっちゃけていい？めんどくさいのが来たんですけどー。誰かコレ引き取ってー・・・・・・・・・・・・・・無理だとわかってるけどさ～・・・・・・・・・・

ちぃ姉だったら、「後にしろ」って切り捨てるかな？たば姉だったら・・・・・・「誰？いっくんに勉強を教えてるんだから、邪魔、消えてよ」とか言いそうだな

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「いや、いっちー。自己紹介で言ってたじゃん」

ちぃ姉が担任だったことがショッキングだったのは判るけどさ、クラスメイトの自己紹介はちゃんと聞いてようよ

「あなたはそちらの人と違って殊勝ですわね」

「たしか・・・セメント・コルセットさんだよ」

「そんな変てこな名前では有りませんわ！わたくしはセシリア・オルコットですわ！イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしの名前を間違えるなんて失礼にも程がありますわ！」

うん、わざと間違えたからね。あからさまに上から目線の人の名前はまともに覚える気はありません

しかし・・・・・我ながらネーミングセンスがないな

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

なら、とっとと席に戻ってくださいと要求してみようかな？

「代表候補生って、何？」

がたたたっ！！

聞き耳を立てていたクラスの女子数名にほーちゃんに俺、ついでに

コルセット（笑）さんもずっこけた

「あ、あ、あ・・・あなたっ！本気でおっしゃってますの！？」

「おう。知らん」

コルセット（笑）さんはあまりのことに冷静になったのか、こめかみに指で押さえながらぶつぶつと言い出した

「信じられませんわ・・・極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら・・・・・・」

失礼な、テレビはあるし俺は代表候補生のことも知ってるぞ。いっちーはテレビ見てないかもだけどさ

「で、代表候補生って？」

「いっちー。国家代表ＩＳ操縦者の候補生だよ。単語からもわかるでしょ」

「そう言われればそうだ」

簡単なことは見落としやすいって言うけど、いっちーのこれは駄目だよねー

ああ、そうだ。ついでに教えておこうかな

「国家代表になれば、モンド・グロッソに参加出来るんだよ。モンド・グロッソで部門優勝すればヴァルキュリア。総合優勝したらブ

リュンヒルデって称号が貰えるんだ。つまりは、代表候補生に選ばれるのは一般的に優秀なエリートさんなんだよ」

「そう、エリートなのですわ！」

うわ、五月蝿さが復活したよ・・・・・・

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とクラスを同じくすることだけでさえでも奇跡・・・幸運なのですわ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「・・・・・・馬鹿にしてますの？」

おお、いっちー。無意識とはいえ、馬鹿にするような発言をすると
は・・・・・・俺も便乗しておくか

「俺はコルセット（笑）さんよりも、ブリュンヒルデのちぃ姉に教えてもらえる方が幸運だと思うんだけどね」

俺の言葉に、クラスの女子がうんうんと頷いている

ちぃ姉の教えは厳しいものになるんだろうけど、ブリュンヒルデに授業とはいえ直接教えて貰えるのは大きいもんね

俺の言葉にコルセット（笑）さんは追い詰められたのか、話を切り替えてきた

「ま、まぁ・・・ＩＳのことでわからないことがあれば・・・・・・

泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一を無駄に強調してるなー・・・・・って、入試って言えばあれか

「いっちー。倒したとか言ってなかった？」

「ああ、俺も倒したな。そういう始はどうだったんだ？」

「俺は――――1勝1敗だな」

「1回だけじゃなかったのか？」

「1回目はすぐ終ったんだよ。で、それだけじゃ参考になんないってことで――――――――ちぃ姉が打鉄に乗って再試験させられた・・・・・・・」

その時はもう大変だった。専用機じゃないのに、ちぃ姉が乗る打鉄に俺の攻撃は掠りもしない。近距離だと、ちぃ姉の剣戟を裁くので精一杯・・・・・・

――――――あれか？戦闘前に俺が勝ったら婚約ね、とか言ったせいだったのか？もしそうなら・・・・・・・・・・・・・ちぃ姉の照れ隠しになるのかな？

「ちょ、ちょっと待ちなさい！入試で教官を倒したのは、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子だけではってオチじゃないのか？」

いやいや、いっちー。彼女たちの入試の後に、緊急で俺たちの入試があったんだよ

普通校の入試時期にＩＳ動かしちゃって、ＩＳ学園の方も、急いで入試準備とかしてたんだろーね。いやいや、ご苦労様でした。文句があったら、たば姉にどうぞってことで

コルセット（笑）さんは自分以外の、それも男が教官を倒していたことに憤慨？してるのか、ギャーギャー何か言っている。が、ここで都合よく三時間目のチャイムがキーンコーンカーンコーンと鳴り響いた

「っ・・・・・・！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

「良くない。断固お断り。話があるならマネージャーを通してから来てね。コルセット（笑）さん」

「オルコットですわ！！」

まー、マネージャーなんていないけどね

コルセット（笑）さんはプンスカと言う擬音が見えるくらい怒りながら、自分の席に戻っていった

◇

「それではこの時間は実践で使用する各種武装の特製について説明する」

一、二時間目とは違って、やまちゃん先生じゃなくちぃ姉が教壇に立っている

授業内容はよっぽど大切なことなのか、やまちゃん先生までノートを持って聞いている

そんな中、俺はちぃ姉を網膜焼き付けようと――――全盲だから焼き付けれないけど――――凝視している。さらに、専用ＩＳの光輝にお願いして、ちぃ姉の教師姿を録画してもらっている――――家宝にしますよ、うん

え？授業はいいのかって？俺がちぃ姉の授業を聞き逃すことはありえない！天地がひっくり返って世界が崩壊するくらいありえない

「・・・ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス対抗戦？代表者？名前からして、めんどくさそうだ

「クラス代表者とはそのままの意味だ対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・・・・早い話がクラス長だ。ちなみに、クラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るもの

だ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。それと、これは一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

きっとそれ以外にも、授業道具の用意の手伝いとかホームルームの進行とかいろいろやるんだろーな・・・・・・・・めんどくさいからパスパス

きっとうちはいっちーが推薦されるんだろーね。ちぃ姉の弟だし、男のＩＳ操縦者だし――――俺もそうだけどねー

「はいっ！織斑くんを推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「俺もいっちーを推薦します！」

俺はクラス長なんて嫌だ。だから、いっちー。生贄（がんば）ってくれ

「では、候補者は織斑一夏・・・・・・・他にいないか？自薦推薦は問わないぞ」

「って、俺！？」

いっちー、このクラスに織斑は君だけだよ。ちぃ姉も織斑だけど、教師だしねー

・・・・・・・・・・・・・・・ふと、思ったけど、女教師ってなんか・・・いいね。放課後に個人授業とか――――――おっと、よだれが、フキフキ

「織斑、世辞に着け、邪魔だ。さて他にいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちょ、ちょっと待った！なら俺は始を推薦する！」

ちょっ！なに言っちゃってくれてるのいっちー！面倒だからいっちーを推薦した俺の気持ちを無駄にするなー！

そんな不満の視線をいっちーに向けると、いっちーもこっちを向いた

その視線は――――――俺だって面倒なのは嫌だ！道連れだ！――――――と雄弁に語っていた。オノレ、イッチー・・・・・！

「待ってください！納得がいきませんわ！！」

いっちーと睨めっこをしていると、机を景気良く叩いてコルセット（笑）さんが立ち上がった

てか、納得がいきませんわ、なんて言ってるけど、さっきからちぃ姉が自薦推薦は問わないって言ってるんだから、さっさと立候補すればいいのにね

きっと、誰かがコルセット（笑）さんを推薦したら――――仕方ありませんわね。不本意ですが、お受けいたしますわ――――とか言ってたんだろーね

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

だーかーらー・・・そんなに言うならさっさと立候補しなさいよー。めんどーな女だよー

「実力から言えばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！！」

イギリスだって島国だよね？大きさは違っても島国通しなんだから、このような、なんて言っちゃ駄目でしょーに

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはならないこと自体、わたくしに取っては耐え難い苦痛で――――」

カチン・・・と、隣で撃鉄が落ちたのが聞こえた。それと、さっきから光輝からなんかプレッシャーが出てきてるんだけど・・・？

「イギリスだって、大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ・・・・・・・！？」

あー・・・・・・言っちゃったよ。しゃーない、ちょっといっちーの知識の補強のために口を出そう

「わ、わたくしの祖国を侮じょ「いっちー、ちょっと知識が足りてないんじゃない？」」

コルセット（笑）さんの台詞にかぶせたのは――――わざとです

「イギリスには時計塔のビッグ・ベンやバッキンガム宮殿、ストーンヘンジがある。それにシャーロック・ホームズの舞台やハリー・ポッターの舞台もイギリスだよ？他には有名なチャップリンだってイギリス出身なんだから――――お国自慢がないなんていっちゃ駄目だよ」

「あら、あなたは物分りがいいですわね」

・・・・・・褒めたわけじゃないんだけどねー。いっちーの足りてない知識の補強をしたかっただけだしー

《だが、世界一まずい料理というのは賛成だな》

えー・・・・・・折角場を収めたのに、自分のＩＳにそれを壊されたんですけど・・・・・・ないていいですか？ちぃ姉の胸で

「あなた！やっぱり馬鹿にしてますわね！」

「えーと・・・今のは俺じゃなくて、待機状態のゴーグル（こっち）なんだけど？」

「ゴーグルが話すわけありませんわ！馬鹿にするのも――――」

《まずいのは確かだろう。本来の食感がわからなくなるまで茹でたり、黒くなるまで揚げる。調理段階で味付けらしい味付けもしない。あれで料理と呼べるとでも思っているのか？他国の料理以外でまともなのはローストビーフとステーキくらいであろう》

光輝が饒舌に喋っているが・・・・・・

「おい、光輝。勝手に喋るな。お前が話せることは国家機密扱いなのだぞ。始もちゃんと躾けておけ」

ちぃ姉からのお小言の中にもあったけど、光輝が話せることは国家機密扱い――――――話せるＩＳなんて前代未聞。下手に他の国に知れたら、あーだこーだと煩くなるのは目に見えているからだ

だけど・・・・・・

《我はそのような小さなものに縛られるとでも思っているのか、千冬殿。我は我が道を行くのみだ》

と、まったくもって聞く耳を持ってません。それでも、日常は何とか静かでいてくれるようにはなった

思い返せば――――メンテの後は喋り捲りだったな。ダムが決壊したかのように一日中話し続けてたっけか・・・・・・

「ＩＳが・・・喋った！？」

コルセット（笑）さんの口から漏れた、そんな言葉。クラス中が同じ言葉を視線にこめて、俺を見ている

「詳しいことは後で終に聞け。今はクラス代表を決めるのが先だ」

《そうだな、千冬殿。我としては他国を侮辱しているのに、自国の侮辱は許せないという女子（おなご）よりも、我が主の方が良いと思うぞ。もしくは一夏殿だな。それに、態々こんな島国うんぬんと言うくらいならば、早急に母国へ戻れ小娘。ああ、あとＩＳも捨てることだな。

ＩＳは文化的に後進的な国の物など、乗っていたくもないだろう》

おーい、光輝さんや。これ以上コルセット（笑）さんを挑発しないでー。なんかめんどくさいことになりそうだから、お願いしますよー・・・

「あなた！わたくしを侮辱しますの！？」

《事実だ》

「決闘ですわ！！」

《良かろう！四の五の言うより判りやすい》

――――――――と、ここで冒頭になるわけだ。逃避（かいそう）終了

「あなたが負けましたら、わたくしの小遣い――――いえ、奴隷にしますわよ」

《ならば貴様が我等に勝てなかった場合、貴様には・・・そうだな、一日、我等の使用人にでもなって貰おうか》

「ふん。わたくしに、イギリスの代表候補生のこのセシリア・オルコットに勝てるとでも」

《夏の虫、氷を笑う――――貴様の狭い世界に新しいものを刻み込んでやろう》

２人は・・・いや、１人と１機は互いに火花が出るんじゃないかと睨み合っている――――てか、光輝を睨むと自動的に俺も睨まれるん

だよね～

て言うかさー・・・・・・操縦者じゃなくてＩＳが戦闘の了承とるのって・・・・・・どーなんだろー？

助けを求めようとちぃ姉に視線を送った――――――ちぃ姉、助けて。そして、結婚して――――――と

そしたら・・・・・・つぃっと視線を逸らされた

《さて、ハンデはいかほどとするか？》

「あら、アレだけの大口を叩いておいて早速ハンデのお願いかしら？」

《何を言っている、小娘。こちらがつけるに決まっておろう》

光輝の意見は尤も。幾許かハンデはあったほうがいい――――こいつは半端無いし

でも、光輝の言葉に返ってきたのは――――クラス中からの笑い声だった

「お、終くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女よりも強かったのって、大昔の話だよ？」

「終くんはＩＳを動かせるし、専用機も持ってるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

クラス中から聞こえてくる声――――その台詞が俺の神経を苛立たせてくる

「むしろ、わたくしがハンデをつけなくていいのかと迷うくらいですわ。ふふっ、男が女よりも強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがありますのね」

この女(あま)が何が可笑しいのか笑っている――――――――イライラしてくる

「ねー、終くん。今からでも遅くないよ？セシリアに言って、ハンデ付けてもらったら？」

後ろの女子が声をかけてきたが・・・その表情は苦笑と失笑の混じったもの――――――――――これで堪忍袋の尾が切れた

「女が男よりも強い？はっ、笑わせるな！！」

今まで黙っていたが、もう無理だ。いっちーとちぃ姉が俺の肩に手を置いて座らせようとしたけど、それを振り払って言葉を続けた

「女が男よりも強いのはＩＳを使える人間だけだ。しかも、ＩＳのコアの数は４６７個――――俺の光輝は除外してだが――――研究用だったり、製作途中だったり、ＩＳ(ここ)学園で訓練機として使用されていたりと、即座に動ける個数は少なくなってくる。さらに、ＩＳを動かせる女性よりも動かせない女性の方が多い。もし男性対女性で戦争が起こったとしたら？ＩＳは確かに強力だが、無敵じゃない。攻撃を許さない弾幕での飽和攻撃を繰り返されれば、エネルギーは切れ、操縦者は生身になり、ただ、身体能力が高い一般女性に戻る。そうなったら、銃弾は防げるか？ミサイルは打ち落とせるか？無理だろう。何をどうとって、女性が男性よりも強い？笑わせるな！女

尊男卑？優遇されているのはＩＳを操縦できる女性だけだ！無条件に女が男よりも強いなんてことはな「終、もう止めておけ」・・・・・・ちぃ姉」

「お前の今の情勢に対する不満や怒りはもっともだ。だが、ここで彼女達に言ったとしても、それが世界に伝わるわけではない。ここは押さえろ」

ちぃ姉に言われて、俺の中に冷静さが戻ってきた

ちぃ姉には感謝しないと駄目だね

そうだな・・・・・お礼に夕食でも作ってあげようかな？そして、ご飯にする？お風呂にする？それともお・れ？なん――――スパァッン――――あいたぁー！

「お前の馬鹿な考えはすぐにでもわかる――――さて、大分話がずれたが、クラス代表者を決める勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。終とオルコット、それと織斑はそれぞれ用意しておくように」

「って、俺も！？」

「お前は推薦されただろう。選ばれた以上、拒否は認めん」

いっちーはがくりとうな垂れて、机に崩れ落ちた。わはははは

「さて、授業に戻ろう」

一週間後か・・・・・・俺は特にすることないから、いっちーの特

訓でもしてるかな？

英国　の　代表候補生（後書き）

始「今回の前書き。本編関係ないのはわかってるけどさ・・・なんで、たば姉出したの」

死食「いや、3巻で束さんのこのネタあったから、つい」

始「『つい』で出すのか・・・」

束「いや～人気者は大変だよね～ブイブイ」

始「それはそうと、今回、俺爆発してたけど？」

死食「ああ、あれね。あれは俺自身そう思ってたのよ。で、代弁？みたいな感じ」

始「へ～、そっか」

一夏「あれ・・・？俺今回の後書きに出番なし？」

死食「うん、なし」

一夏「ＯＴＺ」

死食「では、また次回」

始「感想、待ってるよ」

部屋割り　は　計画的　に（前書き）

前回のＮＧシーン

セシリア「ま、まぁ・・・ＩＳのことでわからないことがあれば・・・・・泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一を無駄に強調してるなー・・・・・・って、入試って言えばあれか

始「いっちー。倒したとか言ってなかった？」

一夏「ああ、俺も倒したな。そういう始はどうだったんだ？」

始「俺は――――１勝１敗だな」

一夏「１回だけじゃなかったのか？」

始「１回目はすぐ終ったんだよ。で、それだけじゃ参考になんないってことで――――――ボンテージ姿に鞭と蝋燭を持った女王様のちぃ姉と再戦させられ、ヘブシッ」

千冬「ありもしない事実を捏造するな！！」

一夏「・・・・・・いや、千冬姉だとありそうで怖いんだけど・・・・・」

前回の投稿から1ヶ月。遅ればせながら更新ですＯＴＺ

部屋割り　は　計画的　に

「うう・・・・・・・・・い、意味がわからん・・・・・・・なんでこんなにややっこしいんだ・・・・・・・・・？」

放課後、いっちーは机に突っ伏せている

原因はあれだ、参考書を古い電話帳と間違えて捨てたからだ

授業は今のところ参考書の範囲内。それでも専門用語が多い。勿論、辞書なんてないから、いっちーにとって今日の授業は物凄く大変だったと思う

「・・・・・・始は今日の授業・・・わかったか・・・・・・・？」

「うん。参考書を捨てるなんて暴挙はしなかったし」

《それに我が直接教えたからな。これでわからん等と言ったら千冬殿にお仕置きでも頼んでいたところだ》

俺と光輝の台詞を聞いたいっちーは、また机に突っ伏した

――――しかし、あれだ。放課後なのに教室の周りにいる女子の数は一向に減らないな・・・・・・・

昼休みは昼休みで、食堂に俺達が向かうと小鴨のようにゾロゾロとついて来たし、食堂に入ろうとすると十戒のモーゼの海割りの如く左右に割れたし・・・・・・・・・・・俺達は動物園に来た珍獣じゃないんだけどなぁ・・・・・・・・・・・いや、ＩＳを動かせる男性なら

十分に珍獣？・・・・・・・・・？

「ああ、織斑くん、終くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

俺達を呼ぶ声の方を見ると山田先生が書類片手に立っていた

この時間に残っててよかったって・・・・・・ああ！お爺ちゃんに頼んでた案件かな？

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って山田先生は部屋番号の書かれた紙とキーを2本出してきた

ここＩＳ学園は全寮制。生徒は寮での生活が義務付けられている。その理由にはＩＳ操縦者の保護も入っている。どこの国も優秀な操縦者が欲しくてあれこれと勧誘やらなんやらをしてくるからだ

「俺の部屋、決まってなかったんじゃなかったんですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅通学って話でしたけど？」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです・・・・・・織斑くん、終くん。そのあたりのことって政府から聞いてます？」

最後の方は俺達だけに聞こえるように耳打ちしてきた

「いえ、俺はなにも」

「勿論聞いてます――と言うか、俺がお爺ちゃんにお願いした張本人ですし」

「そうですか、知りませ、ええっ！？終くん、知ってたんですか！？！？」

ぐわっ！？耳元で叫ばないで！

いきなり耳元で叫ばれたため、俺といっちーは耳にダメージを受けてしまった

周りで聞き耳を立てていた女子達も「何事！」と、顔を覗かせている

「あ・・・すみません・・・・・・そ、そういうわけで、政府特例もあって、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。一ヶ月もすれば個室の方が用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

そう言う山田先生の手には2本のキー。１００１号室と１０２５号室。俺が望む部屋はおそらく１００１号室と見た！

「え～っと。山田先生、どっちの部屋が食堂とかに近「んじゃ、俺１００１号室！」って、始！」

「あ、あはは・・・。食堂に近いのは１００１号室ですけど、寮長室にもなってます」

「・・・それじゃ、１０２５号室に・・・・・・始、大変だろうけど、がんばれ」

「大変？何を言ってるの？俺にとっては天国以外の何者でもない！」
「寮長と一緒で天国・・・・・・？俺には地獄としか思えないぞ？」
いっちーの言うとおり、普通なら寮長と一緒だと色々と大変だろうが――――――事前のリサーチ情報が正しければ寮長はあの人！夜になれば、ぐへへへ・・・っと、よだれが
「これで部屋の方はＯＫですね」
「ＯＫですけど、荷物を取りに一回家に戻ってもいいですか？何にも準備してきてないですし」
甘い、甘いぞ、いっちー！練乳チョコワッフルにトレハロースと蜂蜜をどっぷりかけたくらい甘い！確実に荷物はあの人が持ってきている！！
「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え」
メンデルスゾーンの結婚行進曲と共にちぃ姉（おれのよめ）参上。いっちーの方はダースベイダーの曲が流れてるかな？前にいっちー本人がそう言ってたし
「ど、どうもありがとうございます・・・・・・」
「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」
うん、わかってたけど、大雑把だなぁ。趣味やらなんやら、日々の

潤いも大事だよ？まぁ、娯楽品はある場所に保管して持ってきてるから問題ないけどね

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど・・・・・・・・・・・・・・・えっと、その、織斑くんと終くんは今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

俺もいっちーも大浴場や温泉が好きだから、使えないのは痛い・・・・・・でもね、いっちー。ここはＩＳ学園（おんなのその）なんだよ？

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に入りたいのか？」

「あー・・・・・・」

うん、すっかりそのことを忘れてたみたいだ

「おっ、織斑くんっ、終くん！？女子とお風呂に入りたいんですか！？だっ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

「ちぃ姉と一緒なら喜んで！」

「ええっ？女の子に興味ないんですか！？それはそれで問題のような・・・・・・。それに終くんも教師との不純異性交遊はダメですよ！？それもそれで問題です」

「問題？自分の嫁と風呂に入るのに何か問題で「落ち着け貴様ら！」
ヘプシッ！？」

「あうっ！？」

「なんで俺まで！？」

いい感じに暴走しかけていた、俺と山田先生、おまけでいっちーの頭に出席簿が降って来た。気のせいか、叩かれた音が3人同時だったような・・・？

「えっと、それじゃあ私たちはこれから会議があるので、これで。織斑くん、終くん、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

校舎から寮まで50メートルくらいで、その途中に娯楽ものがないのに、どう道草をくえと？

「ふぅ・・・・・・・・・」

ちぃ姉と山田先生が教室から出て行くのを見送ったら、いっちーが溜息をつきながら立ち上がった

「取り合えず、部屋に行くか」

「そだね。移動しよっか」

いっちーに続いて立ち上がり、ちぃ姉が持ってきてくれた生活必需品の入ったカバンを持った

――――――着替えとかはまったく用意してなかったんだけど、ちぃ姉がカバンに入れたのかな？

◇

「えーと、ここか。１０２５号室」

「だね。取り合えず入ったら？」

寮までくるのも大変だったし。いっちーと寮まで移動し始めると何処からか女子が付いてき出して、寮までかるがもの行進みたいだった

「おう・・・・・・・・って、なんで始はここまで着いてきたんだ？１００１号室は反対側だろ？」

「いっちーの勉強を見るために決まってるじゃん。ＩＳのこと、全然わかってないんでしょ？クラス代表決めまでそんなに時間もないんだし、詰め込めるときに詰め込まないと」

「うっ・・・・・・確かに・・・。お願いします・・・」

こう言ったけど、教えるのは光輝なんだけどねー。俺自身も光輝に教えてもらったくちだし

ドアの前でうな垂れているいっちーを部屋に入るように促して、俺達は部屋に入った

部屋には大きめのベッドが2つ並んで配置されている。なかなかいい物を使っているようで、見ているだけでふわふわなのがわかる

いっちーもベッドのふわふわ感に気が向いているようで、荷物を床に置いてベッドにバフンと飛び込んだ

「おおおお・・・なんというモフモフ感・・・・・・」

ベッドに顔を埋めているから、声がくぐもって聞こえる

「誰かいるのか？」

突然、奥の方から声が聞こえた。あっちの方はシャワー室だったような・・・・・・？

「ああ、同室になった者か。これから一年よろしく頼むぞ」

――――――ああ・・・もう部屋についてて、シャワーを浴びてたのね・・・

この後の惨事が予想できた俺は、黙ってハイパーセンサー、光輝の待機状態のゴーグルを外した。外してしまえば周りは見えなくなる。見えなくなるだけで、何が何処にあるとかははっきりとわかる。というか、わからなかったら大怪我じゃすまないような地獄ともいえる修行をお爺ちゃんのＳＰの人にさせられたから、わかるようになったんだけど・・・・・・ああ、思い出したら涙が出てきそう・・・・・・・

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之――」

「――――箒」

「あはは、ほーちゃん、お邪魔してるよ」

ほーちゃんに挨拶をしたすぐ側から気配を消して、周囲の空気と同化する。所謂、隠形というやつだ。これも地獄のような修行で身に付けざるを得なかったスキルだったりする

光輝を外しているから、ほーちゃんの様子は全くわからない。わからないけど、空気の感じからして、タオル1枚で出てきたってところかな？水滴の流れからしても間違いないね。いっちーも動きが見えないから、視線はほーちゃんに向きっぱなしぽい

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

さっきから2人ともだんまり。つーか、いっちー。あんまりジロジロ見ないほうがいいんじゃない？もしくは「綺麗だぞ、箒」とか言う・・・・・・訳ないか、いっちーだし

「い、い、いちか・・・・・・・・？」

「お、おう・・・」

「っ・・・・・・・！？み、見るな！」

「わ、悪い！」

って、そこで台詞終り！？そこは「綺麗だったから、つい・・・」って、つなげてフラグ立てるべきでしょ！？

「な、な、な、なぜ、お前が、ここに、いる・・・・・・・・・」

「いや、俺もこの部屋なんだけど――――――って、うおお!?」

ほーちゃんのぎこちない問いにいっちーが答えた瞬間、いっちーの悲鳴が聞こえた

空気の流れと音からして、木刀での突きかな?

――――ドタッ!ダダダダッ!バタン!

う〜ん・・・今のは突きを避けたいっちーがベッドから飛び降りて一目散にドアから外に出たってところか?

――――ズドンッ!ズドンッ!!ズドンッ!!!ズドンッ!!!!ズドンッ!!!!!ズドンッ!!!!!!!

・・・・・・あれ?音のする方向と音の種類から判断して、木刀でドアを突き破ってるようだけど・・・・・・・・・あのドア、木製でそれなりの厚さがあったと思うんだけど・・・・・・・・・ほーちゃんは一体どんな剣道をしていたんだ!?

「って、本気で殺す気か!今のかわさなかったら死んでるぞ!!」

ん〜、いっちーなら死ぬことはないんじゃないかな。世間一般で言うところのギャグ補正とか、そのあたりのやつで

「ふー!ふー!」

猫が威嚇の時にあげるような荒い息を吐きながら、ドアから戻ってきた

そして、何やらごそごそと衣擦れの音がしだした。多分、着替えてるんだろう

「ふぅ・・・全く・・・・・・」

「で、そろそろいいかな、ほーちゃん」

「うひゃい!?」

着替えの音が止まったから、着替え終わったと判断して声をかけたんだけど、返ってきたのは変な返事だった

「は、始!?一体いつからそこにいた!?!?」

「いつからって・・・いっちーと一緒に部屋に入ったけど?」

「なにっ!?」

おー、驚いてる驚いてる。ていうか、俺の隠形に気がつくのって教えてくれたSPの人たちや暗部と言われる人達、後はちぃ姉を代表する能力が異常に高い人達くらいだから、ほーちゃんが気がつかなくてもしかたない

「ということは、始。お前は、その、見た、のか・・・?」

「・・・・・・この状態で見えると思う?」

「――――――っ！すまないっ！」

「いや、気にしなくていいよ。話を振った俺が言うのもなんだけどね」

今、ほーちゃんには俺の素顔――――両目に横一文字にはしっている傷跡――――が見えている

「だが、その傷は私のせ「気にしないの。この話はコレでお終い」・・・・・・始・・・・・・・」

ほーちゃんは今でもこの傷のことを気にしているんだな・・・・・・ゴーグルを付け直すと、３６０。の視界が戻り、ほーちゃんの姿も見えるようになった

「さて、ほーちゃん」

「なんだ、始」

「いつまでいっちーを外に出しておくの？折角、同じ部屋になるように画策したのに」

さっきからドアの外のいっちーが「部屋に入れてください。頼む。お願いします。この通り」と連呼してるし、そろそろ入れてあげてもいいんじゃないかな、なんて思ってたり

「確かに、そろそろ入れてやる・・・・・・待て、今お前、画策と言わなかったか？」

「その話は後でするから、取り合えずいっちーを入れてあげない？」

「ちゃんと話してもらうからな」

その後、いっちーは部屋に戻ってきたけど・・・・・・

あまり考えなしの発言をするいっちーと、照れ隠しから来るぶっ飛んだ勘違いをしたほーちゃんの夫婦喧嘩の末

「ブラジャー、付けるようになったんだな」

「〜〜〜〜〜っ！！！！」

いっちーの阿呆発言（かんそう）へのほーちゃんの木刀殴打（てれかくし）が決まり、いっちーは早い就寝と相成った

――――――なに、このコント？

「ふー！ふー！ふぅ・・・・・・さて、始。話してもらおうか。お前は一夏が私と同室になるのを知っていたようだな！」

「うん。お爺ちゃんに頼んで、部屋割りを俺の要望通りにしてもらったんだ」

「轟（ごう）さんだったか？現内閣総理大臣だったと記憶しているのだが・・・・・・おい、まさか・・・・・・・・・」

「それに、ここの運営者とお爺ちゃんは知り合いだったからね。快く受諾してくれたみたい」

何処かの誰かが言っていたっけか。権力は使ってこそ権力だって

「まぁ、俺からの援護射撃（プレゼント）と思ってよ。それじゃ、そろそろ俺も部屋に行くとするよ。同居人はまだ戻ってないと思うけど」

「・・・・・・どういうことだ？」

「俺の部屋は１００１号室なのだよ」

俺のヒントにほーちゃんはちょっと考えた

「１００１号室・・・・・・？私の記憶が確かなら、あそこは寮長室で、寮長は織斑先生だった・・・・・・おい」

「そーゆーこと。それじゃあね、ほーちゃん」

ほーちゃんといっちーの部屋から出ると、部屋の外で聞き耳を立てていた女子たちが俺に近寄ってきた

「ねね、終くん。終くんの部屋、寮長室って聞こえたんだけど・・・聞き間違えってことは・・・・・・」

「聞き間違えじゃないよ。俺の部屋は１００１号、寮長室だよ」

俺の答えに周りの女子達は「ええっ～！！」やら「遊びにいけない～～っ！！」やら、悲鳴を上げていた

俺は彼女たちに「それじゃ」と告げて、我が部屋へと足を進めた

◇

「そんな訳で、やってまいりました。１００１号室！」

誰に説明してるんだろうね、俺は？

しかし、まあ、なんと言いますか・・・・・・

「ここまで予想通りだとは、思ってなかったな」

部屋の惨状を目にして、思わず苦笑がこみ上げてきてしまった

衣類は脱ぎっぱなしで放りっぱなし。ビールの空き缶はピラミッドを築いている。唯一綺麗なのは書類関係のみ

「さて、それじゃ・・・・・・掃除開始ぃ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・戻る部屋を間違えたようだ」

寮長室の住人、教師で寮長も兼ねているちぃ姉の部屋に戻ってきての一言目がこれでした

「戻る部屋は間違えてないよ。おかえり、ちぃ姉。お疲れ様でした」

「・・・・・・あ、ああ。ただいま」

ちぃ姉からスーツの上着を受け取ってハンガーへかける。そして、冷蔵庫からビールを取り出してちぃ姉に渡す

――――――どーよ！これぞ、愛の力！！

「しかし・・・・・・あの部屋がここまで綺麗になっているとはな・・・・・・」

「ふふふっ、片付けは、夫である俺の役めいたっ！？」

「誰が夫だ、誰が」

「それは勿論、おれえええええええええええ、頭が割れるううううううううううううっ！！」

照れ隠し？のアイアンクローが俺の頭をメキメキとおおおおおおおお！！！！

「はぁ・・・・・・始。ここ最近のお前の行動が束に似てきているぞ・・・・・・」

「マジで！？！？」

そんなのはいやだあああ！！！！！！！

部屋割り　は　計画的　に（後書き）

始「前回の投稿から1ヶ月。かなり時間空いたね？」

死食「暑かったり、だるかったり、ゲームしてたり、他の作品読んでたり・・・・・なかなか筆が進まなかったのよん」

始「モチベーションが駄々下がりだったのか・・・」

死食「でも、何故か2巻とか先の内容の方が筆進んだりしてたのよね」

始「頑張って続きを書こうなっ！？」

死食「では、また次回お会いしましょう～」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9031u/

IS〈インフィニット・ストラトス〉Shine of Blindness

2011年10月6日19時02分発行